

研究・調査報告書

| | |
|--|----------------------|
| 報告書番号 | 担当 |
| 17 | 滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門 |
| 題名 (原題/訳) | |
| <p>What level of alcohol consumption is hazardous for older people? Functioning and mortality in U.S. and English national cohorts. 高齢者にとってどの程度の飲酒が危険にあたるのか? 米国・英国での全国的コホートによる生活機能及び死亡と飲酒との関連についての検討</p> | |
| 執筆者 | |
| Lang I, Guralnik J, Wallace RB, Melzer D. | |
| 掲載誌 (番号又は発行年月日) | |
| J Am Geriatr Soc. 2007 Jan;55(1):49-57. | |
| キーワード | |
| 中等度の飲酒、飲酒、生活機能、死亡率 | |
| 要 旨 | |
| <p>目的： 飲酒量ごとに高齢者の生活機能障害及び死亡のリスクを評価する。</p> <p>方法： 米国 The Health and Retirement Study と英国 The English Longitudinal Study of Aging の、2つの地域住民を対象としたコホート研究の参加者のうち、65歳以上の13,333人を4-5年間追跡した。日常生活動作(ADL)、手段的日常生活動作(IADL)、及び認知機能における障害と死亡について、飲酒との関連を検討した。</p> <p>結果： 米国では男性の10.8%、女性の2.9%、英国では男性の28.6%、女性の10.3%が、The U. S. National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism が65歳以上を対象に推奨する基準量よりも多く飲酒していた。ロジスティック回帰モデルを使用して解析を行った結果、平均して一日に約0.5-1合飲酒する人の機能的障害及び機能的障害と死亡を加算したものに関するオッズ比は、平均して一日に約0-0.5合飲酒する人のものと同じであった。具体的には、平均して一日に約0.5-1合飲酒する人のADLに関するオッズ比は1.0(95%信頼区間(CI):0.8-1.2)、IADLでは0.7(95%信頼区間(CI):0.6-1.0)、認知機能に関するオッズ比は0.8(95%信頼区間(CI):0.6-1.1)であった。この論文に具体的なデータを提示していないが、上記の解析とは別の解析モデルを使用した場合も、結果は変わらなかった。飲酒と生活機能障害との関連について性差はなかった。</p> <p>結論： The U. S. National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism が65歳以上を対象に推奨する量よりは多いが、若い成人に対する推奨量以内で飲酒している高齢者の生活機能と死亡について検討した結果、特に問題はみられなかった。中等度の飲酒は利点と欠点の両方を持ち合わせるものであり、飲酒を制限しすぎると、かえってニヒリシズムの(虚無的)反応を招くことや、あまり意味のない努力を重ねることが考えられる。以上の理由から、特に飲酒に関して禁忌のない一日約0.5-1合飲酒する地域在住高齢者に対し、スクリーニングや介入努力を行う意味を裏付けするには、トータルとしての利点もかんがみた経験的実証的エビデンスの更なる蓄積が必要である。</p> | |